

一人一人の読みを大事にする

「読書技術」と評価

―小説「走れメロス」を例に―



愛知教育大学助教授

佐藤 洋一
さとう よういち

1 情報社会・メディア社会の中でこそ「読書」の技術を

情報伝達の手軽さや量・範囲がどんなに拡大しても、文学作品を含め私たちが文字や映像という「情報」を一つ一つ理解・判断し、自分の生き方と結び付けて解釈するスピードは変わらない。

「読書」の技術は、現代の多面的な「情報」を読み解くのに役立つとともに、膨大なメディア情報に取り巻かれている現代の中学生にこそ必要な、国語科の今日的な学習課題の一つである。

例えば、アニメやコミカルなどのメディア情報を読み解く場合でも、そこで必要となるのは、心理や自然描写、作品構成、人物像の変化とその解釈、メッセージと批評性などで、これらは国語科における文学教材での

することで終える学習は、小説の「学び方」「読書技術」の指導と評価の両面からみても貧しい方法である。

以下、生徒一人一人の読み方を生かすための指導ステップと留意点について、要点を述べることにする。

(1) すらすらと意味のまとまりごとに音読（範読→指名）

音読は「正確な内容理解」の基礎。人物・場所（舞台）・時代、語り手（表現の視点）、場面の意味や役割などに触れながら「範読」すると効果的で時間もかからない。

(2) 作品全体の枠組み・設定など「表現の事実」の確認
あらすじ（ストーリー）、状況設定（中心人物と対比的な人物群・語り手の視点・時代背景など）、場面構成、人物像の変化（中心人物の変化と対比的な人物の役割）などを確認する。B4×1―1枚の学習シートが効果的。

「表現の事実」の確認を教師主導でシンプルに、論理的に行うことがコツで、各人物の気持ちなどをくどく問わないことが大切である。この時点では作品の構造について正確に（全員にこれだけは部分を）把握させることをねらいとし、生徒の疑問や意見は尊重しながらメモなどをさせ、(3)の段階で発表してもらうことを指示する。

(3) 自由に意見を持たせ、先生が司会し感想を交流する
これは生徒の関心の実態と課題意識を把握し、豊かな読書技術と発信・交流につなげるためのステップである。この段階の生徒の感想には、個性的な関心の表現や

学習や読書によって培われていくものである。（注）

2 教室での学習が「主体的な読書」に展開する指導を
中学生の読書離れの原因の一つは、教室における国語科の学習（ここでは小説の読み方・学び方）が生徒を取り巻く「生な現実」や「生徒の抱える不定形の課題意識」と遊離し、結果的に教室での学習と教室以外での読書活動がうまくリンクしてこなかったことにある。もちろん小中学校で指導しているのに、生徒の側で豊かな読書活動に生かすことができなかったと言つこともできる。

しかし主人公の気持ちの変化をたどり「主題」をまとめるとか、「作者の意図」という一つのテーマに迫ることとで終始する、いわゆる主題追究型の初歩的な授業方法のみでは、生徒たちに「読書の楽しさ」「個々の感じ方や意見を生かす読書の豊かさ」などの読書技術を十分保証することはできない。民話や創作童話・ファンタジー・近現代小説などのそれぞれ作品固有の特質が十分に踏まえられた上での焦点化した学習になつてこなかったことも、今日的な読書技術が育たなかった要因の一つでもある。

3 小説「走れメロス」の読書技術と生かし方

この作品を 信実と友情 という一つのテーマに集約

表面的な理解からの誤読も含めいろいろなレベルがある。

例えば、「正確に」人物関係やストーリーなどを理解しないままでの感想／作品「走れメロス」の特質である心理描写や語りの技術の効果などを理解していない／中心人物メロスのみに関心を持っている（対比的な人物である暴君ディオニスやセリヌティウスなどの役割と意味に気づかないか、軽視している）／テーマを理解したつもりで退屈し、作品や作家を批判する／時代背景や歴史的なことへの感想を持つ（歴史や社会的事件に関心のある生徒の場合）／既習の小説との類似点や他の太宰の作品との関係を比べて意見を述べる…などである。

(4) 小説の「学び方」のポイントや観点をシンプルに指導
(3)での生徒の混乱の実態や個性的な「読み」の可能性を踏まえ、小説の「学び方」のポイントを1・2時間くらい使つて気づかせると効果的であり、どこをどう解釈する必要があるかという読書技術の指導ともなる。

例えば、メロスの変化（単純な男→より人間的な人物）と暴君ディオニスの変化（人間不信→人間信頼？）を対比させて表にまとめる（人物像の変化と対比的な人物の役割の読み方）。また、メロスが苦悩し葛藤する過程（心理描写の読み方）は平凡だが、誰にも訪れる人生の試練や障害とどう戦つか、本当の意味で最も恐ろしい敵は何かなどを考えさせる場面である。選ばれているエピソード

(事件)の数と内容・表現技術の特徴を整理、確認しながら、自分の経験と重ね合わせながら読ませるなど、二・三点を焦点化して指導するのである。

5)「意見や考え」を持ち、まとめる観点の指導・支援
読書の楽しさと技術を身につけさせるための基礎を教室での学習との 双方向性 との関係から見ると、読むことの楽しさを実感させること、小説の「学び方・読み方」の基礎・基本に気づかせること、自分の意見や感想を持てること(論理的な文章化)、発信・交流による学び合い、の四点が何よりも重要である。

特に の部分での、生徒一人一人の意見や感想を尊重するとともに、分かりやすくまとめて発信・交流できる言語技術(書く・話す・聞く)の指導が国語科にとって必要不可欠である。まとめることによって断片的だった意見や感想が論理的に整理され、新たな発見が生まれる(自己発見と情報の再構成)。また、発表と交流によって友達の多様な視点や考え方に気づき、考えをより深める契機となるからである(多面的な見方と新たな発見)。

この時、自分の意見や考えをどういう角度から整理するとよいか、(3)(4)の学習ステップでの生徒の関心や意見を踏まえ、その観点について例示すると効果的である。

「走れメロス」の場合、次のような観点が有効である。こうした指導は小説「走れメロス」の作品と

〇〇字程度とし簡潔にまとめさせることが「基礎・基本の読書技術と発信・評価」として、生徒に対する負担も少なく効果的である。

内容構成の基本は、三段階の「論理的な報告」の形式とする。「はじめ/問題提起・立場と方法」「なか/具体的な内容や引用・分析、エピソードの紹介など」「まとめ/考察と意見」。この基本の構成が身についたら、これを応用したクイズ形式や資料(イラスト・写真など)を活用した楽しい発信・交流学习を奨励する。

4 読書活動の「評価」

これまでの読書(指導・評価)というと、一つは主人公の生き方や感じ方に共感・感動しながら自分の「生き方」を学ぶという形が多かった。もう一つは同じ作家の作品や類似した他作品を多読し、主人公と作家の生き方について多くのことに気づき(問題意識)、考え語ることが求められてきた。当然、評価の観点にしても、読み手の共感・感動の質と深さ、課題発見意識の的確さ、さらに説得力のある表現力(書く力)が問われてきた。

こうした立場はもちろん今でも重要な読書の一方法ではあるが、どの生徒にも「主人公のみの生き方への共感と感動」を当然の前提とした読書指導は生徒個々の豊かな読みの可能性を限定し、結果的に「読書指導嫌い」・

しての特質を踏まえつつ、「一つの情報モデル」として一人一人の立場から豊かに読み、語らせる観点である。

「走れメロス」は何を語った小説か、自分なりの分析と批評。おもしろい、個性的だと思った表現技術(語り・心理描写・事件の構成など)を抜き出し意見を述べる。各登場人物の中から一人を選び考えを述べる。メロスに限定せず暴君・聴衆たち・山賊たちなどを選ばせると交流が豊かになる。揺れ動く心理と人間性の葛藤を、時代背景と生き方との関連から述べる。現代だつたらどのような状況と障害があるかなど。揺れ動く心理と葛藤について自分の経験を具体的なエピソード(事件)を交えて語る(作品の心理描写の生かし方と情報の再構成)。他の作品との読み比べをした意見をまとめる。これは二通りあって、一つは太宰治の同時期の短編を二編ほど読み比べるもの、二つ目は「走れメロス」と同じ枠組みを持つ他の「成長物語(教養小説)」などと比べるものが考えられる。困難と向き合い葛藤や苦悩しながら乗り越える(挫折する)小説やノンフィクションなどを紹介する。その他、自分が考えた観点やテーマから自由に具体例を集め、まとめる...などである。

(6)六〇〇〜八〇〇字程度にまとめさせ、発表交流し合う文章にまとめさせることで、小説の「学び方」と経験の再構成と論理化ができる。字数は多くとも六〇〇〜八

国語の「文学の授業嫌い」を助長するものである。

必ずしも感動や生き方/主人公のみの生き方と結び付けなくても、目的や興味・関心・自分の立場から読むこと、「情報として読む」ことも大切な読書活動ととらえることが、これからの読書指導・文学作品の授業では必要である。以下は、要点だけであるが「走れメロス」での読書指導の評価の観点、そのポイントを示したものである。

(1)意見や考えの「個性」「主体的な情報理解」の評価
小説「走れメロス」の特質を踏まえつつ、「一つの情報モデル」として一人一人の立場・関心からいかに豊かに読んでいるか。着眼点や考察の個性、具体例(経験)や資料の魅力など、「3の5」で述べた観点はこのした生徒個々の読みを広げる評価のための観点である。
(2)論理的な文章構成(表現技術)・発信レベルの評価
意見は、分かりやすく論理的にまとめられて初めて公的な意味を持つ。これは「話す・聞く能力」の指導と評価とともに国語科の基本指導の一環である。分かりやすいか、説得力のある部分はどこかなど(3の6)参照。

(注)拙稿「連載/メディア・リテラシー教育を創る」『現代教育科学 平成一四年四月号』(明治図書)参照。

